

一般社団法人 ヘルスケア・データサイエンス研究所

研究助成 成果 **概要** 報告書

(成果・概要のいずれかに○をつけてください)

助成年度	2023 年度
本研究期間	2023 年 12 月 1 日～2024 年 7 月 31 日
氏名	小原 竜
所属機関名 (助成決定時)	東北大学大学院医学系研究科分子疫学分野
職位・学位	大学院生(医科学専攻博士課程 3 年)・修士(薬科学)
研究タイトル	妊娠中の抗精神病薬使用と母児のアウトカムとの関連
キーワード	抗精神病薬、先天形態異常、神経発達、周産期、薬剤疫学、レセプトデータベース
研究概要	<p>妊娠中の女性のうち81.6%が服薬に対する不安を抱いているという報告があり(高儀佳代子ら,薬学雑誌. 2010年.)、服薬中の女性の中には妊娠を機に、胎児に与える影響を心配して服薬を中断する場合がある。近年、精神疾患を有する妊婦は増加傾向にある。また、精神疾患を有する妊婦では妊娠中の精神症状悪化のリスクが高いことや精神疾患未治療による周産期合併症発症のリスクが高いことが知られており、妊娠中における精神疾患の積極的治療が求められている。</p> <p>周産期メンタルヘルスコンセンサスガイド2023(日本周産期メンタルヘルス学会. 2023年.)によると、「妊娠中の抗精神病薬使用による胎児や妊娠への影響は否定できないが、統合失調症患者が服薬を中止すると症状が再燃する可能性があるため、原則として妊娠中も服薬を継続する」としている。しかしながら、これまでの我々の研究で、妊娠中の抗精神病薬処方が減少していることが明らかとなり(小原竜ら, 第24回日本医薬品情報学会総会・学術大会. 2022年)、必ずしもガイドと整合していないことを確認した。この背景の一つに、妊娠中の抗精神病薬使用が母児に与える影響を</p>

検討したエビデンスが不足していることによって、医師・患者共に処方・服薬の可否等に対する不安を生じているためと考えられる。

日本における妊婦の抗うつ薬の使用状況と妊娠転帰との関連についての研究は存在しているが (Madoka YS et al, Matern Health Neonatol Perinatol. 2019. Madoka YS et al, Congenit Anom. 2020.)、妊婦の抗精神病薬の使用状況と妊娠転帰との関連についての研究は我々が調査した限りでは存在せず、先に示したガイドに引用されている抗精神病薬に関する研究報告は海外由来のみである。日本と海外とでは抗精神病薬の処方状況が異なること (Krista F et al, JAMA Psychiatry. 2023.)、民族差や医療提供環境も異なっていることから、日本の研究基盤を用いた研究が必要である。そこで、本研究では株式会社JMDCが提供するレセプトデータベースを用いて妊娠中の抗精神病薬処方と母児のアウトカム (母親の流産や児の先天形態異常及び神経発達) との関連を明らかにする。

これまでに妊娠中の母親の精神疾患自体が母児のアウトカムに与える影響について報告されていることから (T Field, Infant Behav Dev. 2017.)、本研究における妊娠中の抗精神病薬処方と母児のアウトカムとの関連を明らかにする解析では、精神疾患の傷病名による補正が必要である。しかしながら、日本における妊娠中の母親の精神疾患自体が母児のアウトカムに与える影響を検討した研究は限られている。本研究の解析で補正に用いる具体的な精神疾患の傷病名を検討するにあたり、妊娠中の母親の精神疾患が母児のアウトカムに与える影響についても明らかにする。